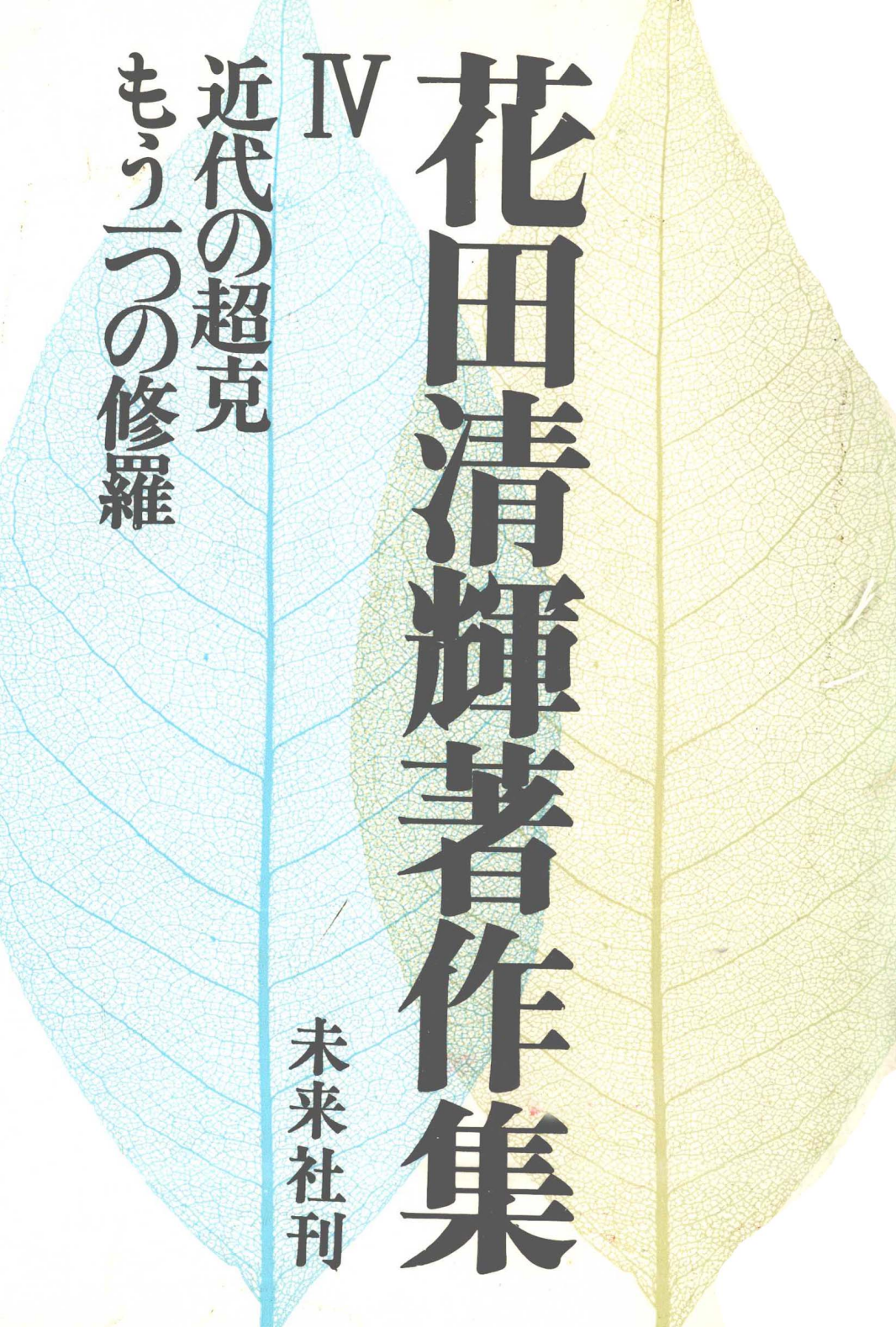




花田清輝著作集

IV

近代の超克

もう一つの修羅

未来社刊

IV
近代の超克
もう一つの修羅



未来社

花田清輝著作集Ⅳ
一九六四年二月二五日第一刷発行
一九七五年七月一五日第三刷発行

定価一五〇〇円

©著者／花田清輝

発行者／西谷能雄

発行所／株式会社未来社

東京都文京区小石川^三の七

電話〇三(八二四) 五三^二代表

振替東京 八七^三八五番

本文製版・装本印刷／形成社

本文印刷／萩原印刷

製本／今泉誠文社

花田清輝著作集 第四卷 目次

近代の超克

スウィッチ・オフ	七
検事側の証人	二七
ロカビリーと諸葛孔明	四
ミツイ・ゲイナー論	五
「実践信仰」からの解放	五
もしもあのとき	空
芸術の綜合化とは何か	六
二つの絵	六
プロレタリア文学批判をめぐって	二一
廣造宝石のきらめき	三
ライネッケ・フックス	三五
笑って騙せ	三
ファースへのノスタルジア	四
ヒッチコックの張扇	四
科学小説	五
第三の一对の目	六
テレビと小説	七

柳田国男について……………	一五
マス・コミ芸術の性格……………	二六
無邪気な絶望者たちへ……………	三〇
魔法の鏡……………	三九
原子時代の芸術……………	四六
海について……………	五三

もう一つの修羅

「慷慨談」の流行……………	六九
公家的なものと武家的なもの……………	七三
維新の暗殺者……………	八二
ユーモリストの眼……………	九五
幕末太陽族……………	九六
日本人の感情表現……………	一〇九
怒りとはにかみ……………	三七
スバイ礼讃……………	三三
現代史の時代区分……………	三四
風景について……………	三四

為朝図	三三
犬夷評判記	三三
『廿四孝』をめぐる	三〇
もう一つの修羅	三三
『平家物語』の思想	三三
ものぐさ太郎	三三
御伽草子	三七
役の行者	四六
モラリストとはなにか	四四

扉装釘 中村 宏

近代の超克

ある思想が、単純な言葉で表現できないほど薄弱であるならば、それはその思想をしりぞけてよいことを示す。

——ヴォーヴナルグ

スウィッチ・オフ

7 スウィッチ・オフ

辻豊・土崎一の『ロンドン―東京5万キロ』と題する自動車旅行記が、ベスト・セラーズの一つになったのは、つぎつぎに展開していく異国の風物にたいする興味もさることながら、なによりそのなかにみなぎっているいかにも戦中派らしい著者たちの闊達さに、人びとが心をひかれたためではあるまいか。戦争中、かれらは、二人とも飛行機乗りだったのである。したがって、かれらは、危機をきりぬけるためのさまざまなプラグマティックな知恵を身につけており、たとえばユーゴで、土崎カメラマンがハンドルをきりそこね、車が、もんどりうって転覆すると、とっさに辻リポーターが、ガソリンに引火しないように、「スウィッチ・オフ」と叫び、そのほうの始末をつけたあとで、かれらは、天井になった運転席のドアから辛うじてはいだし、タバコに火をつけ、まことに「お下劣なはなし」をはじめなのだ。万事、飛行機の不時着したときの要領である。「スウィッチ・オフ」のはうはとにかく、打撲傷をうけ、血まみれになりながら、「お下劣なはなし」もないものだとおもうひともあるかもしれないが――しかし、危急存亡のおり、そんなはなしをすると、不思議に気分がしゃんとして、最上の知恵のうかんできくことを、たびたびの不時着の経験でかれらは知っているのである。鳥のまさに死なんとする、そ

の鳴くや悲しく、人のまさに死なんとする、その言や善し、というところであらう。かれらには、まったく屈託がない。——すくなくともまったく屈託がないようにみえる。たとえば、イランの高原で、さんさん、道に迷った末、ようやくのおもいで、砂漠のなかのみすばらしい一軒のはたごやにたどりついた夜のことを、辻リポーターは、つぎのようにかいている。「あすの心配はやめて、とにかく今夜のめしを腹一ぱい食った。顔を洗った水で作ったチャイ(茶)は、レモンとミツが入って、とてもうまかった。ランプの灯の中で、わたしはわたしのバイブルともいふべき本を読み出した。『石中先生行状記』である。そして笑いながら寝てしまった。」と。

じつをいうとわたしは、右の一節にぶつかるまで、『石中先生行状記』が、今日のヤンガー・ゼネレーションによって、バイブルのように読まれていようななどは、想像したことさえなかったのだ。もつとも、わたしは、辻リポーターが、わざわざ、その本をロンドンまでもっていったのは、かならずしもかれが、「お下劣なはなし」の効用を、十分、知っていたためばかりではないようにおもう。かつて柳田国男が、『遠野物語』の初版本の扉に「外国に在る人々に呈す」という献辞をかけたように、『石中先生行状記』もまた、外国で読めば、ひとしお感興のますような作品にちがいない。なぜなら、そこには、前者ほどではないにせよ、郷土に根をはやしたまま生きつづけている昔ながらの日本人のすがたが、あざやかにとらえられているからである。そういえば、それが、発表当時、いっばんから異常な歓迎をうけたのは、占領下の日本に、外国を感じていた日本人自身が、作者の描いてみせたおのれの肖像をながめ、あらためてみずからの美点に気づいたためかもしれないのだ。むろん、その肖像には、誇張があり、歪曲があり、しばしば、理想化されすぎているようなところもまた、ないではなかった。しかし、とにかく、そこには、変れば変るほど、ますます同じだ、といえるような、柳田国男のいわゆる「常民」の肖像があったのだ。一方にはアブレゲール文学があり、他方には民主主義文学があり、世をあげて観念に

たぶらかされているような時代に、ひとり「常民」のもつプラグマティックな知恵に注目し、数年にわたって『石中先生行状記』をコツコツとかきつづけるといったような力業は、過去において、『海を見に行く』や『麦死なず』のような作品をかいた作者にして、はじめて可能なことなのであろう。

しかし、ひるがえって考えるならば、飛行機の不時着したさい「お下劣なはなし」を試みることによって、落着きをとるもどすといえ、エロティシズムもまた、まんざらでもないような気がするとはいえ、つまるところ、それは、危機にのぞみ、つぎに打つ手を考えるために待合あそびなどをするブルジョアの処世術などにも通ずるものであって、べつだん、目新しいことでもないかもしれない。とすれば、そういう人物にとって、「バイブルともいうべき本」である『石中先生行状記』のなかにみいだされるエロティシズムもまた、要するに、それのもつ鎮静的な効果のゆえに珍重がられているにすぎず、それによって、因習との対決を目ざす『チャタレイ夫人の恋人』のなかにみいだされるエロティシズムなどにくらべると——いや、田村泰次郎の『肉体の門』のなかにみいだされるそれにくらべてさえ、はるかに調子の低いものであるかもしれないのだ。そこでは、エロティシズムが、単なる手段として——それも危機を回避するための賢明な手段として、至極、慎重な手つきでとりあげられているだけのことである。さらにまた、その作品のなかに描かれている「常民」のすがたにしても、これらの潜在意識のなかへはいりこんでいて、これまで未知だった領域へ深く探ぐりをいれていく、といったような行きかたではなく、すでにステロタイプ化しているかれらの在りかたの無条件的な肯定の上に立って、そこに牧歌のようなものを夢みているにとどまる、といえはいえるのだ。もしもそうだとすれば、『石中先生行状記』は、要するに、日なた水のようになまぬるい教訓文学ということになるのではなからうか。

といって——だからといって、わたしは、いささかも『石中先生行状記』を過小評価するものではない。辻り

ポーターのはなしではないが、それは、戦後の読者にとっては、まさにレモンとミツの入った、顔を洗った水で作ったイランの茶のようにうまかったのである。そして、かれらは、これまた、辻リポーターのように、それを読んで、笑いながら寝てしまうことができるので満足した。したがって、親切な作者は、かれらの笑いがクスクス笑いから映笑にまでたかまって、すっかり、かれらの眼が冴えてしまわないようにと万全の注意をはらっている。たとえば「黒いワンピースの娘の巻」で、常習の万引娘を描き、笑うにも笑えないような暗い世相の一端にふれると、作者は、大いそぎで、つぎのような逃口上をつぶやき、さっさとそこから身をひいてしまうのである。「もし誰かが、黒いワンピースの娘の話の小説に書こうとすれば、いろんな方法があるだろう。まず第一に、階級史観の立場から、娘の一切の不幸の原因は、資本主義社会の不正な機構に基くものであるという、割り切った解釈で描いていく方法である。第二は、人道主義的な立場で、事件をペーソスやニュアンスで^ぼ筆^ほかし、漠然とした希望を前途に匂わせるような描き方である。第三は、虚無思想を基調にするもので、事実以上に物語を陰惨に誇張して、強烈な陶酔に読者を誘おうとする描き方である。ほかにもまだいろいろあるだろう。だが、それ等のどれも、一応の形はまとまっていたとしても、小説であって事実でない事はたしかなのだ。事実とは、少しずつ、或いはひどく違ったものである。石中先生は事実を恐れる。有り合せの物尺で事実を簡単に計ったり、有り合せの絵具で事実を強引に着色したりする事を恐れる。だから石中先生は、いつもウソの事件とウソの人物だけを描いている。巨人や小人が出て来るお伽話だけを描いているのだ。そういう臆病で貧弱な芸術的職人が、石中先生の正体なのであろう……」と。

プロレタリア文学も、ヒューマニズム文学も、デカダン文学も、嘘っぱちばかりならべたてながら、さもさも人生の実相がここにある、といったような深刻づらをしている。しかし、わたしには、そんな羊頭をかかげて、

狗肉を売るような罪の深い真似はできない。それよりも、毒にも薬にもならないような「お伽話」をかいて、人びとを笑わせているほうがいい。——というのが、この作者の言いぶんなのだ。わたしは、そういう作者の言いぶんには、かならずしも不賛成ではない。『石中先生行状記』を、文学の現状にあきたらず、フォークロー（民話）の伝統を否定的媒介にして、十九世紀リアリズムを止揚しようとするものだ、などというところ、どうもはなしが太げさになりすぎるが——しかし、わたしには、作者に、そういう意図が、まんざら、なかったともいえないような気がしてならない。もしもそうだとすれば、かれは、かれの「お伽話」で、せっかく人びとを笑わせようとしているのだから、もっと涙のほど徹底的に笑わせてもよかりそうなものだという感じがわたしにはするのであるが、如何なものであろう。常習の万引娘など、笑の絶好の材料ではないか。おもうに、この世の中には、笑うにも笑えないような事実など、なに一つとしてないのである。しかるに、この作者が、たとえば『宇治拾遺』や『今昔』のなかの「お下劣なはなし」の作者たちのように、無邪気に笑わないばかりではなく、『醒睡笑』や『きのふはけふの物語』の作者たちにくらべてさえ、はるかに分別くさいようにみえるのは、かならずしもかれが、支配階級の愚民化政策に協力しようとおもっているからではなく、たぶん、自然主義的リアリズムのために骨がらみになっているからにちがいない。そもそもこの作者のセックスにたいするものの見かた自体が、自然主義的なのだ。

『麦死なず』（角川文庫）の解説のなかで、山本健吉は、この作品を、当時の転向文学のきわめて近くに位置した作品であると称し、「おそらく石坂氏は、マルクス主義の運動にみずから飛びこんだことは一度もなかったであろうから、これを本来の意味の転向文学ということとはできないが、氏がマルクス主義に激しく揺り動かされ、その運動の有形無形の影響ないし被害をこうむり、転向による心の傷痕を受ける位置に、間接的にせよ受ける位置

にあつただろうことは、想像できるのである。」などといっているが、いったい、この作品のどこに、「転向による心の傷痕」のようなものがみとめられるというのであろう。要するに、この作品は、エロティシズムの観点から、昭和初期のマルクス主義運動をとらえた、一篇の風流滑稽譚にすぎないではないか。そういう意味では、この作品は、やはり、同一の観点から、戦後の民主主義運動をあつかった『石中先生行状記』といささかもえらぶところはないのである。そして、転向文学ということになれば、むしろ、前者よりも、後者のほうが、その名にふさわしい作品かもしれない。もっとも、その転向が、マルクス主義からのそれではなく、自然主義からのそれであることは、いま、ここで、あらためてことわるまでもあるまいが。

どうやら『麦死なず』のころの作者は、世のつねの自然主義者の例にもれず、小意地のわるい眼で、コンミニストたちの生態を觀察することを好んでいたようである。そしてかれは、「かれらが、みずからのうちに発見したと信じているものはこれだ。しかし、かれらのうちに実際に起こっているものはこれだ。」と得々としていったのだ。しかし、かれらが、みずからのうちに発見したと信じているものが、階級意識で、かれらのうちに実際に起こっているものが、ただの性欲だというのでは、ご自慢のかれの小意地のわるい眼というやつも、タカの知れたものというほかはない。なぜなら、かれは、階級闘争の渦中にまきこまれまいとして、いつものようにエロティシズムを、危機回避の手段として採用しているにすぎないからである。

たとえば『麦死なず』のなかには、つぎのような一節がある。「牧野の評語の第三は『我々プロレタリアートは人を観る眼をもつていなければならない』というので、謂わばさきの二評語の基礎をなすものであるが、人を観る眼の大切なことは強ち^{あなた}プロレタリアートに限った事ではないから、これには五十嵐も異議なく賛成である。しかし当事者が牧野のような独身の青年である場合には、件の^{くだん}評語中『人を観る眼』という箇所を『男と同様女

を「観る眼」と散文化^{バラックシメ}する必要があると思うのだ。斯ういうのはケチな捨台詞^{セリゴト}に過ぎんのだらうか……。国際左翼文壇の模範作家シヨロホフの『開かれた処女地』の中に、主義の権化^{ゴンバ}ともいふべき鉄の人ダヴィドフが共産政府の施設に好意をもたない淫蕩^{いんどう}な美しい農婦のルーシユカと恋に落ちる場面が描かれてあるが、真情流露、いかにも読者を首肯せしめずに置かない充実した一節である。あそこを、頭の意識で肉の欲情を訓練づけることがいかに困難であるかを物語る一挿話と解してもさして歪んだ読方ではないと信ずるが、さて、牧野とアキの場合をも含めて、一と頃日本の左翼に続々と発生するらしく見えた階級恋愛と称する新形態の生活様式にも、仔細に観察すれば、当事者達の独合点に過ぎない輕佻奇激な分子が少からず混入していたのではないのだろうか。」と。せつかく、『開かれた処女地』を読んでも、えりにえて、そのなから、ダヴィドフとルーシユカの挿話だけに注目するところに、この作者の特色が——いかにも日本の自然主義者らしい特色がある。むしろ、日本の最初のコンミュニストたちのなかには、意識的にせよ、無意識的にせよ、過去の儒教主義の残滓がコピリついていていたであらう。のみならず、運動の初期の段階は、弾圧のはげしさも手つだつて、必然にかれらにストイックであることを要求したであらう。したがって、当節流行の言葉でいうならば、「よろめきコンミュニスト」のうまれるのは当り前のことだ。しかし、かれらの「よろめき」を、鬼の首でもとったように吹聴して、どうせ人間とはそういうものだ、などとヤニさがられては困るのだ。そこに日本の自然主義者の十年一日のような「人を観る眼」の単純さがあるのである。ルーシユカに心をひかれるからといって、ダヴィドフを、「ただの人」に解消してしまつてはいけない。それにもかかわらず——というよりも、むしろ、それゆえにこそ、かれは、依然として、「鉄の人」なのだ。なぜかれらは、ダヴィドフの「鉄の人」としての一面と、「ただの人」としての一面とを——そしてそれらの二つの面が、きつてもきれない関係にあるということ、ちゃんととめようとしないのであらう

か。わたしには、まったく不可解というほかはない。

しかし、まあ、かれらとしては、「鉄の人」を、すべて「ただの人」に解消してしまつて、「現実暴露の悲哀」などといって、かれらの「人の観る眼」のするどさを誇っているあいだが花なのである。いつの日か、かれらの小意地のわるい眼が、苦労人のなごやかな眼に変わり、こんどは「鉄の人」のマイナス面のかわりに、「ただの人」のプラス面の発見につとめるようになる。そして、自然主義の悪意の文学がヒューマニズムの善意の文学に墮落してしまふのだ。むろん、わたしは、こんなことをいうからといって、ただちに『麦死なず』や『若い人』を前者に——『石中先生行状記』や『青い山脈』を後者に擬するものではない。ただ、この作者のエロティシズムにたいする対決の仕方に、たぶん自然主義的なもののあることを指摘したかっただけのことだ。もっとも、葛西善蔵をおもわせるような人物の登場する初期の短篇『金魚』などを読むと、どうやらこの作者は、私小説作家の生きかたにも危険を感じて、そこからもどんどん逃げだしてしまつたらしい。そういえば、第一作の『海を見に行く』や、同じころ発表された『キャンベル夫人訪問記』などには、昭和初期のモダーニズムの匂いが濃厚であるが——しかし、モダーニストとして徹底するには、あまりにもこの作者は自然主義者であつて、例のコンヴェンショナルな「人を観る眼」が、そこにゆうゆうと落着くことをかれに許さない。つまり、一言にしていえば、この作者には、身をすててこそ、うかぶ瀬もあれ、といったようなところが、いっさい、ないのである。いつも踏んぎりのつかない状態で、ウジウジと保身の方法ばかりを考えているのだ。しかし、島崎藤村ではないが、文学者として、「わたしのようなものでも生きたい」とおもふとき、そもそもこういう煮えきらない人物は、いかなる手段に訴えて、突破口をつくつたらいいものであろうか。まず、「スウィッチ・オフ」と叫んで、プロレタリア文学やモダーニズムや私小説と絶縁し、そのあとで、おもむろに「お下劣なはなし」をはじめればいいので